

正

研究領域	研究分野	所属又は装置名	氏名(ふりがな)
志望する研究領域・研究分野・所属・装置名			

※正 ① 1部（綴じ込み）及び② 15部（複写）計16部を提出すること。

研究領域	記入要領
作曲	○独唱を研究分野とする者 自由曲20曲の曲名を記入すること。 ○オペラを研究分野とする者 自由曲（テリリア）5曲の曲名（下記2演目に含まれるものを除く） オペラ2演目（全曲）の演目名及び役名を記入すること。
鍵盤楽器	演奏時間50分前後、リサイタル形式で演奏する自由曲名を記入すること。
弦・管・打楽器	○それぞれ指定された3曲の自由曲名を記入すること。 ○室内楽は、演奏時間50分前後のリサイタル形式で演奏する自由曲名（複数）を記入すること。
指揮	○指定された作品8～10曲の自由曲名を記入すること。 ○レバートリーの一覧表は、本用紙に準じた適宜な用紙に記入すること。
邦楽	曲種のことなる自由曲10曲の曲名を記入すること。

六十一年七月發行)

〈資料〉音楽学修士論文題目一覽

【昭和三十一年度】

加田萬里子
Brahms に於ける楽節構造の研究 — Schenker の
理論の展開 —

服部長子 Generalbass 研究II

小川美智子 わらべ唄の楽式について

大西友信 宮古民謡 ―共同研究に基いて―

(注) 1. 記入については裏面の記入要領を参照すること。

2. ※印欄は、記入しないと。

小島美子 滝廉太郎から橋本国彦までの歌曲(続) — 伝統音楽との関連における技法上の諸問題 —

【昭和三十九年度】

阿部摩耶 Giovanni Gabrieli の器楽作品について
石垣怜子 動的形式理論における部分反復の意義について
吉川浩子 ハインリッヒ・シュッツ — Geistliche Chormusic における技法の研究 —
佐野光司 二十世紀初頭における和声の諸様相 — 十二音技法以前の A・シェーンベルクを中心として —

【昭和四十年年度】

久野寿彦 狂言歌謡の音楽的特徴について
草野妙子 箏とその音楽 — 朝鮮の伽耶琴を中心とする箏の研究 —
小柴はるみ 日本のリズムにおける拍 — 歌詞の配分を中心とした民謡のリズムについて —
田中信子 Denis Diderot の音楽論
富重 潮 G・マラーにおける交響曲の解体
樋口 紀 ドイツ十七世紀におけるコラル編曲
原田宏司 ベルリン楽派の研究

【昭和四十一年度】

荒川恒子 クヴァンツの “Versuch einer Anweisung die

Flöte traversiere zu spielen” について — 翻訳と私論 —

梶川信子 崑曲における曲碑 — 旋律型とその変化 —
高島万智子 W. A. Mozart の Opera <Le Nozze di Figaro> に関する原典資料研究 — 自筆楽譜と初演の台本及び手写本を中心として —
舩山 隆 音楽形式の時間的構造
星 旭 明治期の箏曲における諸問題
村井靖児 初期の三味線音楽の研究 — 三味線組曲の音楽理論的研究 —

【昭和四十二年年度】

西 恒子 G. Ph. テレマンの受難曲研究 — 主にヨハネ受難曲を中心として —
稲田浩子 通奏低音の歴史的研究 — マテゾンの小通奏低音練習書について —
内野允子 メロドラマ序説
岸本宏子 ルーカ・マレンツイオの五声マドリガーレ
金田一美津子 雅楽における只拍子の研究 — 音楽のリズムと舞のリズム —
小林 緑 モーツァルトと対位法 — とくに一七八二年《パッサカリア》を中心として —
藤沢紀子 ヨハン・クリスチャン・バッハ — ロンドンにおける彼の活動と音楽 —

松崎由美子 音楽的知覚の問題
水野信男 コプト音楽研究

【昭和四十三年度】

石原笙子 タイ国の古典音楽研究 — CHUI-CHAI の曲を中心に —
軽部洋子 十八世紀の旋律論Ⅱ

河崎郁子 音楽における力動性の把握 — ハウゼッガーからツッカー・カンドルへ —

月溪垣子 尺八古典本曲の研究 — 構成法について —

【昭和四十四年度】

佐治順子 フランス・クラヴサン組曲の様式的研究 — 特に舞曲クラントを中心に —
須貝静直 ジョスカン・デ・プレのミサ曲

水田 堯 シェーンベルクの歌曲における楽曲分析 — ピエロ・リュネールを中心に —

河端宏子 J・クーナウの教会カンタータ

村井満恵 アルバン・ベルクの《ヘルル》の作曲技法の研究

【昭和四十五年度】

小川康子 M. G. Morn のシンフォニア研究
高市真知子 プロテスタントのコーラルⅡ — ルター死後、十七世紀半ばまで —

樋口 昭 風流踊歌 — 近世初期歌謡への民俗音楽学的アプローチ —

村原京子 ヘンデル・カンタータ研究

【昭和四十六年度】

金子治子 シェリング哲学における知的直観の理解
藤井慎子 アルバン・ベルクの作品研究 — 無調的な作品の構成について —

石田ちづる シュッツのシンフォニアエ・サクラエの楽曲研究

大崎滋生 交響曲におけるソナタ形式の変遷 — ヴィーン古典派の三人の巨匠に見る —

大津陽子 ウツチエリーニの器楽作品 — 教会ソナタと室内ソナタの成立過程について —

瀧井敬子 シュトックハウゼンにおける音楽形式と音楽的時間
宮本憲子 G・B・ブラッティの器楽作品研究

【昭和四十七年度】

朝妻明敏 ヴェーベルンの十二音技法による作品の研究
櫻井哲男 濟州島の民俗音楽 — 民俗音楽研究方法の一試案 —

寺本まり子 超越としての教会音楽 — ジョスカン・デ・プレの詩篇モテットに関する一考察 —

【昭和四十八年度】

天野千佳子 ハルモニアの探究 — 初期ピュタゴラス派の音楽論

研究―

浅岡寿雄

十二音音楽における響きの問題 ―シェーンベルクのピアノ作品を中心として―

岡村陽子

クラウディオ・モンテヴェルディ《オルフェオ》に関する一つの解釈

金子静江

音楽起源論

高瀬まり子

昭和初期の民族的作曲様式について

安田啓子

ゲオルク・ベームのカンタータ

【昭和四十九年度】

平田公子

聖アウグスティヌスの音楽観

大来治子

フランチェスコ・カヴァッリのオペラ

須藤敬子

リトルネロ形式の変遷について

滝澤達子

アラビア音楽の音組織 ―アル・ファラービーとイブン・シーナーの音楽論より―

【昭和五十年度】

泉 健

ハインリヒ・ベッセルラーにおける音楽聴の問題

笠羽映子

クロード・ドビュッシーの歌曲に関する研究

―ドビュッシーとヴェルレーヌ―

川瀬康子

沖縄宮古群島池間島の民謡

関根和江

ベートーヴェン晩年の弦楽四重奏曲

松橋麻利

クロード・ドビュッシーの音楽思想

茂手木潔子

義太夫節の旋律の研究とその応用 ―『酒屋』、『堀

諸橋雪子

川』の分析と、新作《明烏蝦夷落葉松》の試み―メシアンの音楽の技法的研究

吉田和子

F・クープランの《クラヴサン曲集》における形式の研究

渡邊きみ子

ガムランの音律

【昭和五十一年度】

佐藤実佐子

南インド古典音楽の理論と実践 ―ラーガを中心に―

宮内 勝

音楽「空間」への問い ―音楽のトポロジーの試み―

岡田真紀

石垣市における青年の音楽嗜好 ―那覇市及び東京都と比較して―

片桐 功

アリストクセノスと四度 ―アリストクセノス音楽理論に関する一考察―

高野 茂

リヒャルト・シュトラウスの交響詩にみる新しい形式の理念

茂木一衛

W・A・モーツァルトの協奏曲作品のフィナーレ研究

龍村あや子

アドルノの音楽批判論 ―現代音楽社会学的研究―

【昭和五十二年度】

南口あけみ

リヒャルト・ヴァーグナーの作品におけるメロディ―と形式に関する一考察

栗倉宏子

川上 晃

塚田健一

今日のイラクにおける二種類の旋律体系 — バグダッドのイラク・マカームとシリア正教会の旋律から — シューベルト研究

自然民俗に於ける口琴と和音唱法の起源 — 台湾山地ブヌン族とニューギニア中央高地ダニ族の比較音楽研究 —

仲井真知子
音楽の意味の問題 — 初期ニーチェの諸論考を中心 —

鳴坂公江
沖縄県本部のウシデーク 国頭村、大宜味村、旧久

志村における歌と踊の比較研究

坂崎 紀
ビクトリアとフリギア旋法

増山賢治
京劇の旋律構造

山口博子
Secunda Pratica — モンテヴェルディのマドリガ — レに見る新しい音楽の創造 —

Lam, Joseph S. C. (林 萃青) 唐楽早拍子曲の形式に関する研究

【昭和五十三年度】

Emmert, Richard J. 能における舞事の研究 — 中之舞を中心に —

佐藤みどり
I・クセナキス — 数学による作曲 —

坂崎則子
エリザベス朝イギリス・リユート音楽研究 — ケン

ブリッジ大学手稿譜 Dd.5.78(III) —

西原 稔
クルト研究序説 — クルトにおける心的契機と音楽

哲学の諸問題をめぐって —

松島裕子
音楽作品と演奏 — ルイ・ラヴェルの哲学における

小澤和子
「分有」の概念に基く一考察 —

大形式作家としての先駆者ローベルト・シューマン — 《ゲーテのファウストからの場景》にみられる形成理念 —

越谷純子
リゲティ研究 — 響きのテクスチュアの漸進的変化 —

【昭和五十四年度】

種瀬陽子
タイ国音楽研究序説

Thompson, Robin 高麗楽の音楽的考察

山田智恵子
義太夫節の音楽構造

山縣敬子
狂言における音楽の研究 — 劇と音楽 —

Ackermann, Peter 山田検校の代表作品の歌詞と音楽の特質 — 中七曲を中心として —

浦本裕子
アゼルバイジャンの音楽 — アシクについて —

金城 厚
沖縄諸島の神歌

土田英三郎
Sonatenform と Hauptform — Sonatenform 概念の成立をめぐって —

西川留美子
シヨパンの作品の調性構造

【昭和五十五年度】

久保田慶一
教会カンタータに於ける諸問題

小石川和代
ロマン派音楽におけるリズム構造

高橋美都

法隆寺伝統行事の研究 ― 行事構成と音楽構造の分

析的研究・文献と譜本による歴史的研究―

益山典子

バルトークの形式に関する一考察

森 泰彦

モーツァルトと楽種 ― 年代が確定された器楽作品

(二七七〇～一七八〇) に見られるジャンル意識―

【昭和五十六年度】

細川周平

クルト・ヴァイルの記号論 ― 『マハゴニー市の繁

栄と没落』における「異化」について―

尾山真弓

J・S・バッハの旋律楽器とオブリガート・チェン

バロのためのソナタ ― 編曲の観点からの研究とそ
の実践的応用―

大橋悦子

トーマス・ウィールクスのマドリガルにおける様式

変遷をめぐる一考察

田中亮子

邦楽器のための現代作品研究

田辺史郎

古代音楽の性格 ― 日本音楽思想史試論―

萩原いづみ

大鼓手組と手附の構造研究

橋本久美子

V・ツツカーカンドルの音楽思想研究

秀村冠一

アルバン・ベルク初期作品の分析的研究

Blasdel, Christophe

尺八を考える ― ディオニソスのおおよび

アポロンの表現について―

田村史子

ジャワの旋律型と音階

大竹知至

ビルマの伝統音楽

井上さつき

十九世紀初期におけるフランスの交響曲

津上智実

イギリス・マドリガルにおけるマドリガリズム

― 受容と変容―

関 美知雄

フーガ作家G・F・ヘンデル ― 彼は〈非正統的〉

か?―

長野俊樹

アーノルト・シェーンベルクの音楽思想 ― その概

念と論理―

服部夏実

長唄の音楽的特質について ― 唄と三味線を中心

に―

藤岡由美子

ロシア音楽の美学 ― アサーフィエフの「イントネ

ーション論」をめぐって―

若林リン

山田流箏曲に見られる旋律型

【昭和五十八年度】

鳥越けい子

サウンドスケープ・デザイン ― エコロジカルな観

点からのより良い音環境創造のための提言―

久保田育子

十八世紀の〈混合趣味〉研究

青柳謙二

志向性としての音楽作品 ― サティの《ソクラテス》

を例に―

大西紀代子

イゴール・ストラヴィンスキーにおける音楽的引用

とコラージュ

白石美雪

転換期の音楽聴 ― ケージの音楽における聴取の問

【昭和五十七年度】

題―

武久源造 Stylus Fantasticus におけるデイスポジツイオに

ついて

長木誠司 音楽的身振りと意味生成 ―データー・シュネー

ベルの作品を中心に―

植崎洋子 現代日本の作品における変奏の技法 ―三善 晃、

松村禎三の管弦楽作品を中心に―

Nelson, Steven G. 五絃譜新考 ―記譜体系の分析的研究を通じ

て―

原 明美 フランツ・リスト晩年のピアノ作品研究

森本美恵子 音楽記号論研究 ―その方法論をめぐって―

宮丸直子 長唄鳴物の手法

永岡 都 セリアリズムの音楽 ―その技法的・美学的考察―

【昭和五十九年度】

石田式子 カラウイタンにおけるコロトミック楽器の役割

曾我昭子 音楽的時間研究における諸問題

芹澤 薫 ジャワ影絵芝居上演における現代的様相

小川和香 イギリス・テューダー朝の教会音楽 ―その二元性

と宗教改革―

木村直子 サウンドスケープ研究の理論と実践 ―音・音楽文

化の成立をめぐって―

斎藤雅代 モンテヴェルディのマドリガレ ―詩選択と音楽

様式の関係―

森 芳子 「音楽の理解」に関する音楽美学的考察 ―ウイト

ゲンシュタインの美学をめぐって―

田中康子 音楽受容史の研究

田村治美 O・メシアンの音楽世界 ―「光」のプリズムへの

探究―

小田 香 引用論の可能性 ―現代音楽における新なる引用の

考察―

林 美穂子 地歌・箏曲の合奏の研究 ―三絃と箏を中心に―

矢向正人 長唄の位相構造

Masden, Kirk 単旋律における調性 ―核音の意味とコンピュー

タによるその決定への試み―

Wheeler, David 古典三曲の純音楽的鑑賞法の提唱

【昭和六十年年度】

田中多佳子 カッワリー ―イスラム教スーフイーの宗教歌

謡―

大倉文雄 アルバン・ベルクのおペラにおける音楽構成とドラ

マトウルギー

大角欣矢 Heinrich Schütz とその師 Giovanni Gabrieli に

おける Deklamation の様式批判的研究

岡田龍之介 十六世紀のデイミニューション

小沢優子 Johann Gottfried Mützel のクラヴィーア・コンチ

ェルト研究

田中美加 陰囃子の歴史的研究

木村紀子 フランス・オペラ成立をめぐっての一試論 ―バレ

―ド・クルールの声楽作品を中心に―

東 暁子 中国地方小戯と民歌の關係

三浦裕子 《中之舞》に関する一考察

佐藤法子 浄土真宗大谷派声明の研究 ―現行の声明曲と勤行

形式―

土田若子 シューベルトのゲーテ歌曲に於けるデクラマツイオ

ーン

【昭和六十一年度】

皆川厚一 バリ島のガムラン音楽 ―その演奏理論と音楽的表

現行為としての性格―

小川伊作 John Dowland 研究 ―Fantasie (Fancy) の分析

を通じて―

川西真理 ミニマル・ミュージック研究 ―その先駆者達の分

析―

鴻巣 香 大南北戯楽事情 ―四世鶴屋南北にみる化政期歌舞

伎下座音楽の仕組―

田中悠美子 三味線音楽の旋律型分析試論 ―初代都一中作の一

中節を中心として―

堤 ゆり フリー・リード楽器研究 ―分類法の確立と分布に

関する考察―

久万田直子 南都打物譜研究

信太美保 ツェムリンスキーの弦楽四重奏曲について

丸山弓子 J. P. ラモーの劇音楽における舞曲 ―楽器のた

めの舞曲」と《歌われる舞曲》にみられる編曲技法―

横井雅子 ハンガリーの伝統音楽におけるリズムの一考察

―「叙情的な歌」を中心として―

大橋マリ 音楽図像学的資料としての《奏楽の天使》

植村幸生 在日コリア人の民間信仰における儀礼と音楽

【昭和六十二年度】

恩地元子 音楽する身体 ―音楽演劇（ムジックテアター）

の可能性をめぐって―

坂尾康子 バリのガムランの音組織 ―ペロググにおけるスレ

ンドロ的旋法―

一柳富美子 ムーソルグスキイのオペラ作品研究 ―その様式の

変遷をたどる―

倉茂紀子 D・ブクステフーデのコラール前奏曲 ―その《叙

情的コロリールング》について―

浅井香織 第二帝政下のパリ ―音楽のミリュー―

漆崎まり 薄物正本の研究 ―その資料的価値について―

大宅 緒 スクリャービンの《神秘劇》 ―その思想と音楽語

法の定向進化―

久万田 晋 奄美大島笠利街城前田の八月踊り ―民俗芸能の統

合的（文学・音楽・舞踊）研究を旨指して―

遠山菜穂美 フランス音楽におけるリヒャルト・ヴァーグナーの

受容 ―一八六〇年代から二十世紀初頭まで―

中村 文 十四世紀の多声ミサ曲 ―ミサ・サイクルについて―

広田 晶子 『朗詠九十首抄』の研究 ―流布本の成立とその歴史的意義―

安原雅之 ロシア・アヴァンギャルド音楽研究

塩田 洋子 不確定性の音楽における方法論と思想 ―シュトゥツクハウゼンを中心にして―

音楽教育修士論文題目一覧

【昭和四十五年度】

佐橋 晋 明治期唱歌教授理論成立についての一考察

【昭和四十六年度】

大畑 祥子 幼児の旋律形成について

遠山 文吉 重症脳性麻痺児及び精神薄弱児に対する音楽療法の試み

村尾 忠廣 律唱歌の研究

【昭和四十七年度】

丸山 妙子 兼常清佐研究

村瀬 夏子 児童の音楽能力の測定

李 鎔一 韓国の学校における音楽教育の展望

【昭和四十八年度】

宮野モモ子 明治期の唱歌教育 ―当時の文献にみた唱歌指導内容および指導法に関する一考察―

早川 和子 教材の現代化への一考察 ―Jazz Improvisationによる創造性の開発―

山田 芳江 世阿彌の教育思想

【昭和五十年度】

小林 幸男 小学校音楽科に民族音楽を導入する試み

沢田 博 日本の伝統音楽に基づいた器楽合奏教材について
―現代の音感を加えた合奏曲の創作―

本間 貞史 音楽教育における現代音楽の扱いについて
音楽発声の実験的考察 ―音声生理学、音響学、聴覚心理学的立場から―

高見富美子 小浜島における音楽学習行動 ―民俗音楽文化の学習―

西村 路子 音楽による治療教育についての一研究 ―精神病院における分裂病患者の事例研究―

米元 えり ピアノ教授法における一考察

【昭和五十一年度】

吉永 誠吾 音楽教員養成制度 ―カリキュラムおよび授業内容についての一考察―